

高見の里開発者の林明

西田 孝司

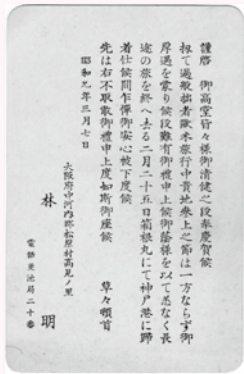
昭和二年、高見ノ里園芸住宅 昭和七年、高見ノ里駅新設



林明宅に建つ記念碑 現在、孫の林秀隆さんに受け継がれている(高見の里1丁目)。



技術者として活躍していたころの林明 (撮影年次不明)



松原村高見ノ里の表記
本来は、松原村上田だが、林は高見ノ里を使った。昭和9年、欧米旅行帰国の挨拶状。電話は更池局であった。

九月一日、近鉄高見ノ里駅は開業八十周年を迎えました。当日、高見ノ里駅では記念乗車券や鉄道グッズの発売のほか、昔の列車や駅舎の写真、子供さん用の制服着用撮影会が行われ、多くの鉄道ファンが訪れました。

近鉄南大阪線は、近鉄の前身の河陽鉄道が明治三十一年(一八九八)三月に柏原く古市間を走り、翌三十二年五月には、河陽鉄道を継いだ河内鉄道が富田林く長野間を開通させたのが始まりです。

しかし、この時期、松原ではまだ鉄道は走っていませんでした。市域にレールが敷かれるのは、河内鉄道が大正十一年(一九二二)四月、道明寺く布忍間が通ってからです。そして、翌十二年四月には、布忍く大阪天王寺(現大阪阿部野橋)が開通したのです。この時、河内松原や天美車庫前(現河内天美)の各駅も設けられました。高見ノ里駅の開業は昭和

七年(一九三二)まで待たなければなりませんでした。

昭和初期ごろ、高見ノ里駅周辺は、一面の田畑でした。明治二十二年(一八九九)四月に、丹北郡高見村が近隣の村々と合併して中河内郡松原村高見となるのですが、高見集落は、のちに敷設される線路の南側にかたまっていました。

鉄道の北東側は松原村上田の地籍でしたが、高見の農地が多く、一軒の家もないこの地に昭和二年(一九二七)、大阪市内から林明というアルミニウム製造技術者が移り住んできました。林は高見の地主などとも協力して、住宅地を広げてゆき、簡易水道や碁盤目状の道路をつくって高見ノ里園芸住宅と名づけた。今の高見の里住宅地の基礎を築いたのでした。

林は明治十六年(一八八三)十月、福島県相馬郡福田村(現新地町)に生まれました。明治四十一年(一九〇八)、東京帝国大学探鉱冶金学科を卒業後、翌年東北の仙台鉱山監督署技師となりました。四十五年には、大阪の藤田組に入り、秋田県こさかの小坂鉱山へ出向しました。やがて、大阪垂鉛鋳業株式会社に招かれ、ここで日本最初の垂鉛製造に従事するようになりました。そして、大正六年(一九一七)、わが国初のアルミニウム電気精錬に成功したのです。

昭和七年十月、高見とは西除川を隔てて隣接していた、当時の南河内郡北八下村河合(現松原市河合)に帝国女子薬学専門学校(現大阪薬科大学)が北河内郡守口町土居(現守口市)から移転してきました。そこで、大阪鉄道は九月一日、高見ノ里駅をつくり、女子学生の通学の足としたのです。薬学専門学校の誘致と新駅の設定に貢献した一人が林だったのです。

林は、その後もアルミニウムの精錬の研究と後進の指導にあたります。昭和十六年(一九四二)には、小豆島(香川県)でのイルミネイト鉱、琵琶湖東岸の天然ガス採取の実現に努力し、二十一年(一九四六)には北海道での硫黄開発にも尽力したのでした。

新興高見の里の発展に尽力した林でしたが、昭和三十五年(一九六〇)三月一日、七十七歳で亡くなりました。四十九年(一九七四)十月、妻の浜(貴族院議員松本剛吉次女)は、技術者であり、地域を愛した夫の偉業を伝えるため、子らとともに線路沿いの自宅に「林明記念碑」「高見の里開発者の石碑を建立したのでした。

記念碑は、高見から大高見の里へと変貌したことを物語る歴史遺産といえるでしょう。